

大学発祥アカデミアの建物

ゲッチンゲン 印象記

木 枝 燦

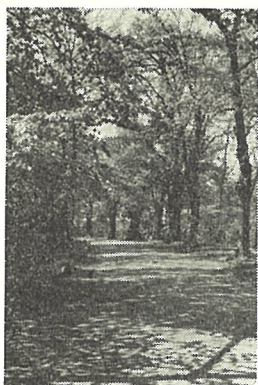
私がゲッチンゲン空気力学実験所の名前を知ったのは子供の頃読んだ通俗科学雑誌に連載された飛行機についての解説記事によってであった。一九〇四年、L・プラントルがハノーバー工科大学からゲッチンゲン大学教授に着任し、その年境界層理論を創始して航空流体力学に新分野を開拓して以来、ゲッチンゲンは飛行機に関する研究で世界のメッカの一つという地位を保ち続けている。現在この実験所は西ドイツ航空宇宙研究実験機関に所属し、実験流体力学、理論流体力学、空力弾性学の三研究所から構成されている。

一九二五年カイザー・ウィルヘルム流体研究所が創設されると、プラントルは初代所長に就任した。これは現在マックス・プランク流体研究所として発展し、空気力学実験所と同居しており、後者が工学的色彩が強いのに対して、前者は理学的な色合いが濃い。実験所の南側、フェリクス・クライン高校の前に変哲もないプラントルの住いが保存してある。所内の電話帳で見ると、この両者に関係しているドクトルは五〇数名であり、教授称号をもっている人も一〇名ほどある。

ゲッチンゲン大学は、後に英国・アイルラ

ンド王となったハノーバー侯の設立したドイツ有数の大学で、数学のガウス、クライン、物理学のウェーバー、化学のブンゼン、核分裂のハーン、変った所ではグリム兄弟など、多くのすぐれた人達が関係している。大学のキャンパスは東西一キロ、南北三キロ程度にまたがり、現在北方へ新しい建物を建設中であり、キャンパス内にはマックス・プランク医学、同じく生物物理学研究所がある。

昨年四月初旬から七月下旬まで、私は幸いにしてこの空力実験所に滞在することができた。早曉ハンブルク空港に下り立った時は気温零度、空には暗雲が垂れこめ氷雨がぱらつく有様で、累積した疲れと風邪による発熱が重なり、見知らぬ異国での前途を思うと心細さと張りつめた気持が交互に襲ってきて冷えたりのをせたりするのであった。国鉄のマックス・プランク号でハンブルクより南下すること二時間半、美しく管理されたドイツの丘や野の中、晴れたかと思うと忽ちに曇る空の下を二等のコンパートメントを一人占めにしてゲッチンゲンに着いた時は雨になっていた。麦はわずかに伸び、村落には人影も見えず、牧場の牛と溢れんばかりに泥水をたたえ



美しい散歩道

て流れる小川と岸辺の並木、遠くに教会の尖塔、垂れ下がる暗雲の合い間にのぞく青い青い空は、雑然として賑やかな日本の沿線風景には見られぬ美しさと淋しさを感じさせた。

実験所のゲストハウスの与えられた部屋は広く、かつ古びて殺風景であった。ゲッチンゲンは第二次大戦の戦禍を免れたが研究施設はすべて接収されたので、二〇数基の風洞も戦後の再建である。しかしゲストハウスは戦前のものらしく、部屋には手を洗う水もない。そこを根拠地にして毎日研究室でロッタ先生、マイヤー先生のグループの研究成果を勉強させて頂いた。ロッタ先生は大分前に退職されたそうであるが、ドイツの慣習で生涯研究室を保持し、毎日朝早くから後輩の指導と自らの研究を続けておられる温和なおじい

さんである。永い間不勉強であった自分を恥じ、また両先生に限らず周囲の人々の研究意欲には敬服したことであった。

研究室は三人同居である。コンラート氏は実験装置関係のエキスパートで、特許関係の書類が部屋の隅に積んである。つい先頃までゲッチンゲン大学オーケストラのコンサートマスターでもあり、奥さんはピアニストである。オーストリアでゲレンデスキーを楽しんできたと元気に話すおじいさんだが、英語がさっぱり通じないのには閉口した。もう一人はジュトマーさんという米国から来た若い研究者であるが、もともとオーストリア人であるのでドイツ語は母国語である。しかし二人とも研究室では全く雑談をしない。朝夕の挨拶だけで黙々と仕事をする。

コンラートさんは研究室にやってくると手紙の開封から始める、木の柄に刃を植えた簡素なナイフは使い古されて柄の一部が丸くへこんでいるが、一様にさびてはいても紙切りと鉛筆削りには最適の切れ味になっている。今でも二〇インチの計算尺を愛用していて、ポケット電卓には見向きもしない。金づちやドライバーをもって歩きまわっていることも

ある。半日がかりで機の鍵を修理されたこともあった。バイオリン弾きらしく指を大切にしておられるが、手や足を動かして働くのが好きで、通勤も古びた自転車である。勤務時間がすむと作曲をしておられるようであった。

ジュトマーさんは米国のカソリック大学から来た陽気でハンサムな青年である。毎日電算機を使って三次元ポテンシャル流れの計算をしていた。なかなか満足な結果がでないらしく、日曜まで使って仕事をすることもあった。部厚い計算結果をドサリとくず籠に放りこんで溜息をつくが、すぐ気を取り直してやり直しにかかる。ロッタ先生がやってきて、二人で早口の議論をしていることもあった。毎日毎日そうして勉強して、風邪で苦しそうな日も休まずに頑張って、結果に満足するまで三カ月半、計算が完了したときは実にうれしそうであった。

私はこの二人にはさまれて、日本人は働きすぎだというのは一本本当だろうかと思っただ。日本の大学ではあれやこれやの仕事が多すぎて、忙しいことは忙しくて働いているように見えるが、働きの質という点ではどうで



ライネ運河の桜

あろうか。西ドイツでも、カメラ、オートバイ、腕時計などは日本製品で占められそうな勢である。その原因は日本企業が人間の労働を高速で良質な仕事をする自動機械にかえたためであろう。大学は企業のようなシステムではなく、教育と研究を機械にやらせる訳にはいかなが、それらに専心できるような有機

性をもたせるべきであろう。ロット先生をリーダーにし、マイヤー先生を所長とする実験流体力学研究所の仕事を見ていると、平等よりは公平、慎重よりは駆動力という考え方が強いように思われた。

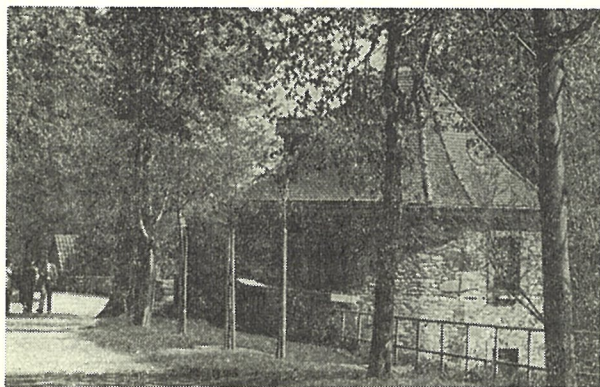
当年のヨーロッパの天候は一八八八年以来といわれる位異常であった。それでも四月は春らしく若芽も伸び、桜やこぶしなどの木々も、たんぽぽやバラなどの草花も花をつけ始めた。ある日などは汗ばむくらい暖かく、研究室の窓から見える民家の庭では子供たちが水着をきて水遊びをするようなこともあった。青空を次から次に旅客機が飛び、その飛行雲が窓外の大樹の決まった部分に決まった角度で結びつけられるのをぼんやり眺めているような時もあった。しかし横なぐりに冷い雨がしぶく日も多く、靴も洗濯物もなかなか乾かなかった。

ゲッチンゲン¹は古い静かな町で、中心部にはデパートもあり商店も多いが、夕食に出かける頃には店も閉まり人通りもあまりなかった。中心部をとりまいて環状に堤のような道がある。両側はカスターニア²(マロニエ)、菩提樹、楓などの大木が美しい若葉をつけてい

る。この道を通って食事に行くのは楽しかった。私が歩く時間には散歩の人達もほとんど帰ってしまつて、雨の日などは誰にも逢わぬこともあった。そんな時には高校時代の逍遙歌³や「椰子の実」などを調子外れに歌って歩いても気兼ねはいらない。「ラインの城やアルペンの、谷間の氷雨……」という氷雨も実感がこもるし、ゲッチンゲン⁴の彼方のポプラ並木を傍景にして真赤な夕陽が沈むのを見れば「流離の憂い」にも同感できる。榆⁵の大木の下では「雄々しくそびえるエルムの梢」という句も現実そのものだし、菩提樹の下で「菩提樹」を歌うこともできた。

美しき五月が数日で去つてしまうと、夏がくるという期待に反して天候はますます悪くなつて行つた。その空の下で次々に可憐な草花が紫、青、黄、赤、白ととりどりの花をつける。四月に開き始めたライネ運河⁶の岸の桜は寒さに凍てついたように少しづつ少しづつ開いてきて、傍を通ればバラの香がするようになった。マロニエが咲き、小さな実が道一ぱいに落ち敷く日が続いた。

雨でも風でも晩闇の中から歌い始める小鳥たちの声にも心を慰められた。芝生には黄色



ビスマルク学生時代の下宿

いくちばしをもち、真黒なからだをした「くろうたつぐみ」がしきりに土をつついている。この名前を教えて下さったのはコンラートさんであるが、床に頭をつけばかりにしてこの小鳥がみみずを掘り出す真似をされた。みみずを食うせいか美しい声で長々と歌う。その節の中にはうぐいすのようなメロデ

イも混じる。そのほかに単調な淋しいリズムをくり返す小鳥もいる、ゲッチンゲンゲツンゲンと啼いているようにも聞こえる。それらの歌声の中に教会の鐘があちこちから響いてくる夕方が多かった。食事を終えて帰って来ると、研究所とその向いにある大学の理論物理や数学の建物の上を空中戦のように燕が群れて飛びまわるのであった。

ある日雨の街角でフルートを吹いている中年の男があった。曲はバッハである。路上の箱にはいくらかの小銭が入っている。服装は貧しげであるがその態度は懸命である。同情をひこうとする気配は毛頭ない。そのひたむきな様子に感動した。何人かの男女がそれをじっと聞いている。そこにドイツがあった。

ゲッチンゲンではすべてが美しく秩序正しく、時々演習帰りの戦車の列が街路を轟々と走るほかは静かで穏やかである。気候のせいか時には冷やかな感じもした。六月の末から再び暖房がはいった。郊外には工場もあり近代化が促進されているが、ここはあくまで学園の町であって、バッハの無伴奏曲のような静かな深い知的な調べが格調高く奏で続けられることと思う。

（大学工学部教授）

